

雑誌「お話の木」



昭和12年(1937)5月、雑誌「お話の木」が「小川未明主宰童話雑誌」として創刊されました。発行所は、児童雑誌「コドモノヒカリ」を出していた子供研究社です。

未明は、創刊号に載せた「『お話の木』を主宰するに當りて宣言す」のなかで、「今日の子供は、決して昨日の子供ではない。少しく留意するなら、児童等の常識が、いつしか時代と共に変遷したる事実について看取するであります。」「子供達は、既に何等琴線に触れることなき、勸善懲惡式の古いお伽噺から離脱してしまつたけれど、まだこれに代るべき、美しき鮮やかな夢を持たずにゐます。」「常に児童の心をして、善美、高尚、純粹なるものに憧憬せしめ、もつて明朗なる人間性を養ひ、道理の弁別について過たず、よく自己の行為を反省せしむる」ものが、童話文学だと述べています。

また未明の同記事の下に、「編集後記」として、奈街三郎が「『お話の木』は、久しく要望されてきた童話雑誌です。が、単に往年の童話雑誌の再現ではありません。いまどき、あの時代の、あの大人の感傷を、あのままくりひろげたところで、なんの発展性がありませう。それがまた、現代の子供になんの関りがありませう。／『お話の木』は、あの古い絢爛な歴史の土のその上に、どつしりと植ゑつけられた『新しい樹』です。」と書いています。

大正期後半以降、隆盛を見た芸術的児童雑誌の多くは、この頃、姿を消していました。「あの時代の、あ

の大人の感傷」は、戦争へと向かう重い空気の中では受け入れられるものではなかったのでしょうか。「お話の木」が創刊された昭和12年(1937)の7月には、盧溝橋事件が起きて日中戦争が始まります。未明はその事件に興奮し、一気に戦争協力へと傾斜していきました。昭和12年10月号には、「僕も戦争に行くんだ」という童話を発表しています(上記写真)。主人公の少年は、戦場で勇ましく戦う兵士を思い、大きな力に感激し、出征兵士を見送りながら、タイトルの決意を固めるのです。

他にも未明は、「お話の木」へ次のような童話を発表しています。

- 「花の咲く前」 昭和12年5月
- 「相撲」 昭和12年6月
- 「白い雲」 昭和12年7月
- 「真昼のお化」 昭和12年8月
- 「眼鏡」 昭和12年9月
- 「友情」 昭和12年11月
- 「嵐の中」 昭和13年1月
- 「雪の降つた日」 昭和13年2月

なお未明は各雑誌の口絵の後に続く扉に、その月の言葉として、短い詩的な散文も載せています。

当館では、「お話の木」全巻を所蔵しています。

